

北海道の若者を対象としたひきこもり予防に関する研究

—中学校時代の学校での経験を対象として—

○ 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科博士後期課程 米田 政葉 (008824)

志渡 晃一 (北海道医療大学・004278)

キーワード3つ: ひきこもり, 一次予防, 症例対照研究

1. 研究目的

ひきこもりとは「様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」と定義されるものであり、15～39歳の若者の54万名がこれに該当するとされる。好発年齢は15～18歳と20～22歳とされている。ひきこもるきっかけについてははじめ、不登校、職場問題などが指摘されている。さらに、ひきこもるきっかけが不明であるものも一定程度存在することが指摘されており、誰もがひきこもり状態になる可能性があると言えよう。ひきこもり経験者は種々の疾患の発生リスクが高いことが指摘されている。また、長期化によりQOLが低下する可能性があることが指摘されている。このことからひきこもり予防は喫緊の課題である。しかし、これまでひきこもり予防に関する研究が十分行われてきたとは言い難い。そこで本研究では、ひきこもり経験者を対象とし中学校時代の学校での経験に着目しその関連を検討することにより、ひきこもり予防に向けた示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究はひきこもり予防に向けた示唆を得ることを目的とした症例対照研究である。2018年4月から12月に、ひきこもり経験のあるもの及び性・年齢をマッチングしたひきこもり経験の無いもの各30名を対象とし、無記名他記質問紙を用いた面接調査を実施した。

調査項目は①ひきこもり経験の有無、②基本属性項6目、③中学校時代の学校での経験n項目他とした。分析に当たっては、ひきこもり経験の有無を目的変数、他の変数を説明変数としてFisherの正確確率検定を行った。

3. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、対象者に1)結果の公表に当たり、統計的に処理し個人を特定されることはない。2)調査によって得られたデータは、研究以外の目的で使用しない。3)調査に参加しないことで不利益を被ることはなく、かつ途中で同意撤回を認めるという条件をについて口頭及び書面にて説明してもらい、同意の得られたもののみを対象とした。本研究は北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉研究科倫理委員会承認を得て行った研究である。なお、本研究は北海道開発協会平成30年研究助成金を受けて実施した。

4. 研究結果

1) 基本属性

本研究の対象者はケース群，コントロール群ともに男性 60.0%，女性 40.0%であった。平均年齢はひきこもり経験群では 30.8±7.4 歳，ひきこもり非経験群は 30.3±7.1 歳であった。過去に精神疾患・障害の診断を受けたものはひきこもり経験群では 56.7%，ひきこもり非経験群は 3.3%であった。

2) 中学校時代の経験との関連

表 1 に中学校時代の学校での経験との関連について有意差の見られた項目を示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は、「友人がいなかった」、「話し相手がいなかった」、「悩みを相談できる人がいなかった」、「困ったときに頼れる人がいなかった」、「授業についていけなかった」、「成績が悪かった」、「クラスに居場所がなかった」、「学校(クラス以外)に居場所がなかった」、「保健室登校の経験がある」、「不登校の経験がある」の 10 項目であった。

表1. ひきこもり経験と学校での経験の関連(中学校時代)

	ひきこもり経験群	ひきこもり非経験群	p
	28 (100.0)	30 (100.0)	
友人がいなかった	6 (21.4)	0 (0.0)	<0.01
話し相手がいなかった	4 (14.3)	0 (0.0)	<0.01
悩みを相談できる人がいなかった	19 (70.4)	1 (3.3)	<0.01
困ったときに頼れる人がいなかった	20 (74.1)	2 (6.9)	<0.01
授業についていけなかった	14 (51.9)	6 (21.4)	0.03
成績が悪かった	15 (57.7)	7 (23.3)	0.01
クラスに居場所がなかった	15 (55.6)	0 (0.0)	<0.01
学校(クラス以外)に居場所がなかった	15 (53.6)	0 (0.0)	<0.01
保健室登校の経験がある	9 (31.0)	0 (0.0)	<0.01
不登校の経験がある	14 (50.0)	0 (0.0)	<0.01

p1: Fisherの直接確率検定

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

5. 考察

本研究で得られた結果は概ね先行研究と同様の結果であった。しかし、先行研究で関連のあまり見られていないクラスや学校における居場所の有無について関連が見られたのは非常に興味深い結果であり、今後さらに検討する必要があると考える。本研究の有効性は、よりエビデンスレベルの高いひきこもり予防に向けた示唆を得ることである。課題として、例数が少ないこと、性別などの解析を行っていないことがあげられる。今後例数を増し詳細な研究を行うことが課題である

付記

本研究は北海道開発協会平成 30 年研究助成金報告書の一部を加筆修正したものである。